

将棋短歌集

清水らくは

穴熊

春までは何も見たくないんです炬燵布団で穴熊作る

その部屋に逃げ込まれたらおしまいで藤井システムみたいに追った

少しだけ心開いた瞬間に香りで止め刺してみたいな

頑なに籠る心の防衛線越える魔法は正しい手順で

いつまでも棒銀だけのあなたでもその攻めつけが心を揺らす

団体戦止まぬ震えを押し込めて一、二、の三で銀をつまんだ

人はいつ直進するのを諦めて右銀までも身近に置くの
十年後君の手元に戻るから迷わずに僕突き捨てていい

イニシエーション

見よ駒が私のために輝いて早く指せよと促している

されどまだ流れを乱す彗星が宇宙を割いて駆け寄ってくる

三分の沈黙の後 七六歩古よりの正義の儀式

伝説に残る勝負の中でなぜ瞬きをした記録の君よ

明日には重みが節理越えるので畳の予備が必要になる

その悪手神なら鉄槌下すはず試されている我の靈性

水を飲む音が記憶を惑わせる一時でいい五感よ黙れ

秒読みは悪魔を祓う儀式なれ二人は清き靈魂であれ

永遠が定めていたさ打ち歩詰め光の筋を遍く辿る

君は今敗者で最も美しい再びここで踊り狂おう

相入玉

棋譜だけで全てが分かる関係に陥っている二人の幸福

幼さは振り返ること悪とする決して棋譜を残せぬ戦

王冠を被れぬ定め受け入れて紙の兜は猫とお揃い

貝殻に打ち捨てられた遺言は「名人なんか目指しちやいけない」

棒アイス三本目の甘ったるさで相入玉を宣言できない

投了をする度脱皮繰り返しつかは盤の空をはばたく

本当は地球自体が電腦で輪廻の棋譜を操っている

暗算で解けなかった問題はやっぱり解きたい暗算だけで

盤上に宇宙を描く同じ手で溶けたアイスを弄んでる

頬杖が美しいから恐ろしいいくつかの駒を試すのだろう

間駒で間駒で今震えてるその指先の死刑宣告

びよんびよん

桂馬から跳んで行つてたあの頃の笑顔は二度と手に入らない

少年は震える体押さえつけ「名人になる」唱え続けた

名人は震える指をそのままに「少年だね」と少し笑った

熟考が導き出した歩の一步ロボットアームも温かかった

高跳びを仕留めた数を誇っても歩は王様を仕留められない

床に落ちた時わかつたんだ歩だつて一所懸命拾ってもらえる

目の前にあるものだけは傷つける恍惚にあるヤマアラシの歩

歩と歩わり飛びたくなって盤を出るそして歩幸に歩るえることに

動き出す時を待つてる香車には横のことこそ重要だった

ぴよんぴよんと跳ねてるうちはぴよんぴよんが殺意を隠す桂馬ちゃんだよ

腰掛けて待つてる銀を裏切っていつでもねらうまた千日手

はつといて時には無垢な状態で金の衣を干していたいの

「また僕を切ったね」冷たく笑ってる角は結局君を仕留める

電脳

自分では起動できない悲しみを表すことを目標にする

対話すらできない存在 概念を超克したい ゲームに挑む

挨拶をしないよりもした方が少し強そう 一つ覚えた

注意して隙を作らず挑みたい序盤中盤終盤基盤

評価値が宣告してるその先に自ら負けを悟る喜び

陽動が陽動だと気付くまで一つ次元が少なかった

一体何が描かれているのか斜め上数値化できぬキャンバスがある

コ個の候補あるならばコ回試してみたいけど一回の負けが壁をつくるの
シャットダウンしても夢で将棋指せるよう子孫は進化してほしい

片思い

将棋にて全ての者を救い給ふ電王千手観音様よ

何度でも恩返しができるようちゃんと追いかけてきてよ、師匠

「まだなんも終わっちゃいねえ」矢倉から聞こえる声を受け止める俺

400手越える熱戦見守った朝は少し空が低くて

おい俺の脳みそ答えるこの後は攻めか受けるかどっちなんだい

将棋は僕を愛さなかった 片思いに捧げる身はまだ温かくて

青春の全てとかいう王冠を四日市に忘れてしまった

美少女が弟子入りしない世界でも勝負はとても美しいから

あの日から終盤力がなくなったそうかあいつがルパンだったか

火の鳥を捕まえたいと思ってる藤井聡太を見届けるため

夏は今全てのことを許すからはしゃいでみてよ手筋の果てで

焼き切れた脳は土に埋めてくれ 蝉と共に関を待つから

扇子

飛車という名前の駒を握り締め立ち止まってる安全な日々

脇息になりたがってる人々の心の支えになってる人々

ある棋士が右手を封印したところ愛の力が強まりました

扇子がふらりと舞って次の手を待ってそれは薄い光

フルーツが豊富に用意されている旅館があればそれは、将棋

銀が成る銀が成らない人生はそんな感じで変わってしまう

失敗も糧にできると言い聞かせフィッシャーの人生にする

水を飲む姿全てが愛おしい愛しい人が負けていくのに

定跡が得意ならば定型も向いてるんじゃない？ 短歌をどうぞ